

・タヌキはネコ目イヌ科タヌキ属に属する日本在来の中型哺乳類である。北海道を除く全国に広く分布するホンドタヌキと北海道にのみ分布するエゾタヌキとに分けられている。世界的には日本と東アジアにのみ（欧米では毛皮利用目的に持ち込まれた個体群が野生化している）分布する珍しい動物といえる。それゆえ、日本の機関がシンガポール動物園へホンドタヌキのペアを贈ったところ、「パンダ並み」の珍獣と扱われ、タヌキに冷暖房完備の専用舎が用意されたうえに、歓迎式典まで開かれたという。

・イヌ科に属することからもわかるように、その習性はイヌと似ているが雑食性であり、ネズミ・カエル・鳥などの小動物や柿・銀杏などの果実を食べる。また、噛み癖があるため、マヨネーズのチューブを噛み続けて歯形が付いた状態の痕跡をよく見かける。イヌよりも短足ずんどうなのは、オオカミのような平原ではなく、森林や水辺での生活に適応するためといわれている。（指の間には皮膜があり、これが水掻きの役目をしている。）アナグマと違って冬眠は行わないが、秋のうちにたくさん食べて脂肪を蓄えるため、冬の体重は1.5倍ほどになる。

・夜行性の動物であり、天気が良い夜に拾い食いをしながら徘徊し、明け方には帰宅する。日中は、人や外敵の近付かない巣穴や茂みに潜んでいて、家族が一塊になってじっとしている。早朝や夕刻時にも姿を見かけることがあるが、これは、①夜間の天気が悪く朝まで外に出られなかった、②疥癬病※などによる衰弱個体が日中人前に現れた、③巣穴や隠れ場所の環境が荒らされたり破壊されて居場所がなくなった、などが考えられる。

・多摩ニュータウンにおけるタヌキの行動範囲は約50haほどで、一年を通じて家族やペアで行動をともにしている。（ペアは一生涯解消されることではなく、その点では人間やカラスと同様、絆の深いおしどり夫婦といえる。）行動範囲は、いわゆる縄張りと違って、群れどうしで重なり合っている。多摩ニュータウンでは、パッチ状に残された公園や緑地の樹林地から樹林地へとケモノ道を利用して移動することが分かっているが、その間には幹線道路や国道があるケースも多い。交通事故（ロードキル）が多いのはこのためである。また、側溝や中央分離帯の植え込み、歩行者道路などを巧みに利用しているのが観察されており、ケモノ道といっても特別なルートを開拓しているわけではないようだ。

・ためんをする習性があり、上述の徘徊ルート上の数か所にフンのかたまりを見つけることができる。通常は一つの行動範囲につき10箇所ほどためん場があるといわれているが、多摩ニュータウンでは大きなためん場を時々見かけるのみである。ためん場は複数のタヌキが利用するため、フンの臭いを通じて”餌の情報”などのコミュニケーションを図っているのではないかといわれている。使わなくなつたためん場からはフンに含まれていた種子から様々な植物が芽生えてくるため、その一帯が緑のじゅうたんのように見えることが多い。

・タヌキは漢字で「狸（里のケモノ）」と書く。また、タヌキはその臆病な性格から、死んだふりを「たぬき寝入り」と呼んだり、その名前が、「他抜き（他を抜く）」に通ずることから、縁起物として店先や軒先に置物を飾る習慣がある。これらのことからもわかるように、古くから最も人々に親しまれてきた哺乳類である。このほかにも「ムジナ」をはじめとする地名や「たぬき汁」といった料理が今も存在することなど、様々なところで人の接点を垣間見ることができる。なお、タヌキの腹鼓の音を表現した”ぽんぽこ”はタヌキを表す俗語である。

・「平成狸合戦ぽんぽこ」以外でタヌキが登場するものとしては、「たんたんたぬきの」「げんこつやまのたぬきさん」「セロ弾きのゴーシュ」「文福茶釜」「かちかち山」（当時は人を食べる凶悪な化け物であった。）「赤いきつねと緑のたぬき」「どうぶつの森シリーズ」「スーパーマリオブラザーズ3」などがある。

- ・八王子市東部地域(特に住宅地周辺)におけるタヌキの生息分布について、巣穴(古巣含む)を確認している箇所は長池公園・小山内裏公園・松木日向緑地・柳沢の池公園の4地点である。このほか、上柚木公園、富士見台公園、東京都所有の樹林地各所などにも拠点があると思われる。巣穴は、いずれもアナグマの古巣を利用していたり、倒木によってできた窪みにフンなどの痕跡がみつかっている。
- ・主に上柚木地区を徘徊している個体群は松木日向緑地、柳沢の池公園、上柚木公園を拠点に、下柚木郷戸緑地や都営住宅、公団住宅の斜面林あるいは側溝を伝って概ね反時計周りに移動しているよう、ケモノ道はアナグマや野良猫と共有している。時間帯は18時～21時以降である。ちなみにアナグマは0時頃にならないと見られないケースが多く、目撃例でタヌキがほとんどなのは行動時間が住民の帰宅時刻と重なるからである。下柚木郷戸緑地では木製デッキの上をタヌキが、下をアナグマが利用しており、興味深い。  
当地域で最大のためフン場は首都大学東京西交差点の歩道橋下にある。フンの内容物は柿や銀杏、ビワなど様々。
- ・主に下柚木地区を徘徊している個体群は松木日向緑地、柳沢の池公園を拠点としており、富士見台公園、こぶし公園と周辺の道路で多数の目撃例がある。移動の進行方向にはやはり規則性があるように見てとれ、こぶし歩道橋下では毎晩横断歩道と同じ方向に渡るタヌキと野良猫を確認している。なお、ハクビシンは徘徊ルートに規則性がないよう、ケモノ道だけでなく、歩行者道などもよく利用している上に、縄張り意識も強いようである。
- ・主に長池地区を徘徊している個体群は長池公園、蓮生寺公園、都有地を拠点としているよう、浄瑠璃緑地、別所くすのき公園、別所やまざくら公園、別所坂公園、南大沢東緑地、清水入緑地などの緑地帯や周辺の団地や道路で多数の目撃情報がある。一つの個体群の行動範囲としては広すぎる、複数の個体群の行動ルートが重なり合っているのではないかと推測される。長池公園の自動撮影装置で度々記録されている個体群は、目撃情報などから推定してミニストップ向かいの敷地から道を渡ってきてているようである。なお、東京海上日動多摩グラウンド敷地内でもため糞がみつかっており、人気の無い長池公園との境界部も彼らの重要な生息空間のようだ。
- ・主に南大沢地区を徘徊している個体群は小山内裏公園、長池公園を拠点としているようだが、はっきりしない。おそらく、尾根緑道や清水入緑地、内裏谷戸公園、南大沢四季の丘緑地などを通じて複数方向に移動しているのではないかと思われる。目撃情報はそれなりにあり、鎌水方面や町田側からの流入も考えられるため、一つの個体群の正確な行動範囲を推定することは難しい。なお、小山内裏公園には現在でもキツネが繁殖しているとのことであり、キツネが掘ったかつての古巣をタヌキやアナグマが使用している可能性もある。
- ・調査観察によって推測されるタヌキの生息状況を地区ごとに記したが、ほとんどの目視記録は春～秋にかけてである。冬期には餌の状況や生活パターンの変化により、行動ルートも異なっている可能性は充分に考えられる。
- ・生きた個体を目視することがほとんどであるのは、交通事故事例が少ないからではなく、被害に遭ったタヌキは早々に清掃業者や保健所、近隣住民によって回収・処分されてしまうためだと思われる。
- ・多摩ニュータウンのタヌキを学術的に研究した経緯のある機関としては都立稻城高校生物部（現在は都立若葉総合高校となりタヌキの研究は休止）、首都大学東京動物生態学研究室（哺乳類全般が対象）などがある。八王子市全域で見ると、新・八王子市史の哺乳類分布調査が2011年度より現在まで行われている。過去の情報としては故金井郁夫による調査実績の蓄積データが残されており、いずれも哺乳類全体を対象としたものである。

※疥癬病・・・ヒゼンダニの寄生による皮膚感染症。イヌ疥癬、ネコ疥癬などがあり、タヌキはイヌ疥癬に感染する。人慣れし、ペットフードや生ごみを食べるようになったタヌキが下痢を起こし、免疫力が低下している時に飼い犬などと接触機会があると感染することがある。全身あるいは一部の毛が抜け、皮膚がただれていますのが特徴である。家族の絆が強く、仲間どうしのスキンシップが多いことからタヌキどうしの感染スピードは速い。強い痒みを伴うため、搔き続けてさらに脱毛してしまうことから、体温調節ができなくなり、冬場の寒さに耐えられず死んでしまう個体が多い。私が稻城で継続観察した疥癬病のタヌキはシーズン中に7頭から2頭に減ってしまい、その後残りの2頭も姿が見えなくなってしまった。最期は全身の毛が抜け、別の動物のようだった。なお、疥癬病の流行は数年に一度くらいのペースで各地で起きているようである。



稻城の疥癬タヌキ



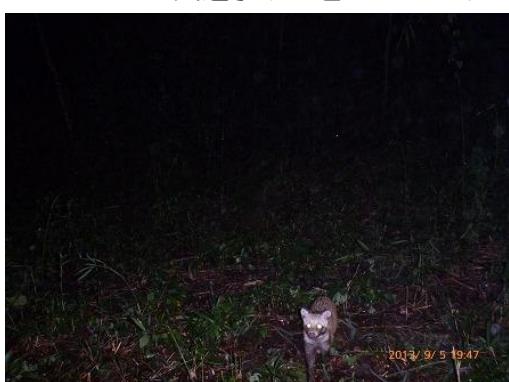
稻城の疥癬タヌキ



交通事故に遭ったタヌキ



長池公園のため粪



自動撮影装置に写ったタヌキ



自動撮影装置に写ったタヌキ